

グローバル通信

特集 AIU 高校生国際交流プログラム
出納先輩新春特別寄稿 後編



2015/1/20

NO.14

保険会社の AIU が企画する「高校生外交官」という国際交流プログラムがあります。これは日米の同世代（高校二・三年生）が相互に訪問し、親睦を図ろうというものです。日本で開催する時は京都に集まります。アメリカではワシントン D.C. とニューヨークを訪れます。本校からは、2 年続けて高校二年生が京都開催のプログラムに参加しました。プログラムの概要について、昨年参加した嘉悦君に紹介文＋体験談を書いてもらいました。関心のある生徒はグローバル部に来て下さい。詳細について説明します。なお、訪米プログラムの申し込みは 2 月 10 日必着となっています。

まず、USHSD (AIU 米国高校生国際交流プログラム) について簡単に説明します。このプログラムは 1994 年から「国際交流を越える人間交流」をテーマに AIU が始めた国際交流プログラムで、費用は奨学金で賄われます。要はタダってことです。毎年 7 月の末から 8 月にかけて京都で行われるため、日本人生徒はアメリカ人生徒をホストする立場にあります。生徒は両国とも男女各 10 名、総勢 40 人のメンバーが参加します。この中から 1 人ずつがペアになり、ルームメイトとして部屋を共有するとともに、お互いを助け合う、いわば相棒、兄弟として過ごします。こうした環境の下で、10 日間という限られた時間ではありますが、日本人生徒とアメリカ人生徒が一緒に生活し、お互いの社会について考えたり、文化を学んだりするアクティビティを通して、友情を深めることができます。USHSD の趣旨です。

2 月に USHSD の募集が始まり、4 月に応募用紙を提出しました。この一次審査を通過した約 50 人の高校生が日本全国から錦糸町の事務局に集まり、リスニング、グループ実習、面接を行います。海城には、何れも 2 年分の「傾向と対策」があるので恐るるに足らずです。

一週間後、合格通知が届き、高校生外交官としての生活がスタートしました。プログラムの開始までの約二ヶ月、全国に散らばる参加者とともに、Skype やメールを用いて、プレゼンテーションやクラブ活動のため、ワークシートを書く、資料集め、僕の場合は楽器と楽譜の確保など、様々な準備を行いました。

プログラムの初日、高校生外交官には 3 つのミッションが与えられます。

1. Representing our countries (日本を代表する)

僕らには、アメリカ人生徒とともに日本文化を学ぶ時間があります。クラブの時間においては、日本人生徒が主体となってアメリカ人生徒とともに日本文化の習得を目指し、最終的には JF (Japanese Festival) において実演します。今年は書道、剣道、武道、茶道、日本音楽の 5 つのクラブがあり、僕は日本音楽のクラブに属していました。僕たちはまず、テーマを祭囃子と日本の季節の歌に設定しました。祭囃子は海城中学高等学校音楽科全面バックアップの下で、篠笛、太鼓、鉦を用いて演奏しました。練習の過程では、各楽器の歴史、日本における祭と神様とは、といったことを一緒に考えました。歌に関しては、ローマ字を見ながら片言の日本語で歌う練習から始め、対訳カードを用いて歌詞の英語での意味を説明しました。僕らの説明を受けて、なぜ秋は「小さい」のだ

(お囃子の演奏)



ろう、とか、もみじには錦や裾模様といった隠喩が使われているが、具体的にはどんな情景の象徴だろうかと、アメリカ人生徒から次々に出される疑問から、気づけば歌詞の解釈が始まっています。このように、単なる日本文化の体験・実演に留まることなく、日本を主体的に深く見つめ直す機会が USHSD あります。

2. Learning about other countries (アメリカについて学ぶ)

USHSD の期間中、ほぼ毎日あったのがクラスです。ここでは、英語を身につけるだけではなく、先生からアメリカの政治制度、社会問題から高校生の毎日の生活まで、様々なことを学びました。授業では毎回、宿題が出されます(笑)宿題といつても、アメリカ人生徒自身の意見や経験を尋ね、それをもとに話す良いきっかけでした。これは、アメリカ人生徒一般にいえることですが、社会問題、政治に対して自分なりのしっかりした考え方を持っています。例えば、自分は Republican(共和党)だ、 Democrat(民主党)だなど、高校生にして明確な支持政党までもっていました。そうしたアメリカ人の高校生と共にアメリカにおける銃規制、ドラッグの問題などを議論することは、とても刺激的でした。一方、スペシャルなイベントで最も盛り上がったのは、プロムです。アメリカの高校の卒業パーティーのようなもので、実際にはプログラム 4 日目だったので、卒業でも何でもありませんでしたが、男女がペアになって、食事をしたりダンスパーティーをしたりと、アメリカ文化を体験できる貴重な機会でした。

3. Building meaningful friendship (真の友情を築く)

「国際交流を越える人間交流とは何か?」「ルームメイトとどのような関係を築きたいか?」この 2 つは、二次面接において頻出のようです。それだけにプログラム中の全ての出来事は、これを達成するためにあると言っても過言ではありません。中でもプログラム 2 日目に行われた Pre-Academic Discussion は、ルームメイトとの関係を築く上でとても重要でした。ここではまず、自分自身の強み、弱み、好きなところ、嫌いなところは何だろうか、自分の人生において最も影響を与えた出来事、人物は何だろうか、と振り返りをした後、その内容を 2 人でシェアしました。2 時間もの時間が割かれていましたが、あっと言う間に過ぎたのを覚えています。この時に覚えた感動は上手く説明できません…ルームメイトとの対話を通して、自分自身と向き合うことができました。また、プログラム中は、前述の homework にも助けられて、毎晩遅くまで 2 人で話し込んでいました。僕のルームメイト Jacob は、一緒に過ごしたのはたったの 10 日間だけでしたが、人生において最も大事な友人の一人であると確信しています。

これまで長々と書いてきましたが、プログラムの魅力すべてを伝えることは全然できていないし、全部読んでもらえるとはそもそも考えていません(笑)そこで、最後に簡単なチェックリストを設けます。

- タダでアメリカ、京都に行きたい!
- 国際交流、海外に興味がある
- 日本文化を伝えたい
- 英語を使いたい、上手くなりたい
- 海城での生活に物足りなさを感じている

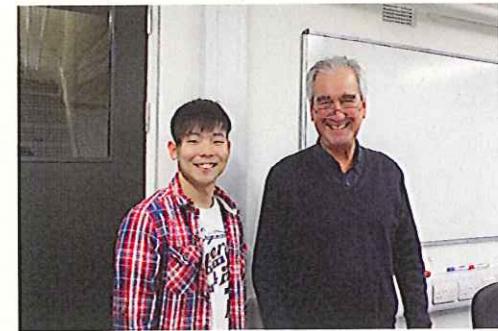
挙げだしたらキリがないですが、1 つでも当てはまったそこの君! まずは高校生外交官 HSD のホームページを見て下さい。今はアメリカに行く HSD の募集期間中です。その上で、一次審査の書類を埋めようという強者がいれば、いつでも 3 号館 1 階グローバル教育部の部屋、若しくは 2 号館 7 階にいる 5 年 1 組嘉悦のもとを訪ねて下さい。自分を過小評価することなく、一つ手を伸ばしてチャレンジしてみませんか。人生を変える経験になると僕が保障します。

「出納楽」のロンドン報告 Part 2

4 パピノー教授特別インタビュー

本節では、私が直接パピノー教授にインタビューさせていただいた際の様子を記したいと思います（※右下の写真は、インタビュー前に教室でお会いした際に撮影させていただきました）。

前節でも触れたとおり、パピノー教授は哲学界では言わずと知れた世界的大権威ではあります、その指導は大変親切で、生徒の細かな疑問にも親身になって答えてくださる温かい先生でもあります。私が知覚の哲学に高い関心を持ち、授業に熱心に取り組んでいたことも理解してくださいました。そこで、グローバル通信の趣旨と私の寄稿について説明した上で、私の後輩である海城生のために特別インタビューに答えてくれないかとお願いしたところ、パピノー教授は快諾してくださいました。では、以下にそのインタビューの様子を掲載しますので、ご覧ください。



出納：「こんにちは、パピノー教授。大変お忙しい中インタビューを快諾ください、ありがとうございます。ご存知の通り、私は東京にある私立中高一貫校で6年間教育を受けた後、大学進学準備課程を経て、キングスの哲学部に入学しました。日本の生徒から見ればやや変わった経験で、また近年少なくとも一部の生徒たちが海外の大学への進学について関心を持ち始めていることもあり、是非教授から彼らのためにお話をいただけないかと考え、今回インタビューさせていただくことになりました。」

パピノー教授：「喜んで。力になれて嬉しく思います。」

出納：「恐縮です。それでは早速質問させていただきたいと思います。まず、一般論として、日本の生徒たちが海外で学ぶことにはどのような意義があるとお考えですか？」

パピノー教授：「ますます国際化が進みつつあるこの世界では、海外での勉強を通じて、自身の見識を広げ、また他言語の運用能力を高めることができるので、自分の将来を切り拓く力になるでしょう。」

出納：「なるほど。では、とりわけロンドンで学ぶことの魅力はどこにあるでしょうか。」

パピノー教授：「ロンドンは学問の世界的中心であるため、あらゆる分野の国際的権威や研究者が一堂に会しています。加えて、ロンドンには素晴らしい就業環境が整っており、様々な画期的なビジネスに触れることもできます。」

出納：「そうですね。続いて、哲学を学ぶということ、少なくとも、哲学に関心を持つということが、海城生の将来にとってどのような重要性をもつくるとお考えでしょうか。残念なことに、日本では、一般に、就職等に全く役に立たないという理由で、哲学そのものが大変軽視されている傾向にあるとよく言われています。」

パピノー教授：「イングランドやアメリカでは、哲学部を卒業した学生たちの就職率は非常に高いのですがね。採用する側は、哲学の探究を通じて学生たちが獲得した分析力や知的イノベーションを非常に評価しています。」

出納：「分かりました。それでは最後に、私の後輩たちに向けて、何かメッセージをお願いします。」

パピノー教授：「海外で学ぶということは、刺激的であると同時に楽しいです。それだけでなく、皆さんの将来の可能性を大きく高めることにもつながることでしょう。」

5 おわりに

本稿では、今年度第1学期の私の学生生活の様子を具体的に説明することで、ロンドンの大学で学問を追究することの魅力を皆さんにご理解いただくことを主な目的として、「キングスの哲学部の教育制度」、「今年度第1学期の学習内容」そして「パピノー教授特別インタビュー」の各節に分けて詳説してきました。前回の記事の反省から、私が学生として現地でどのような生活を送っており、またこれを通じてどのような経験をしているのか、といった具体的な話題をお示しすることを心がけて執筆したつもりではありますが、分かりにくい箇所や不明瞭な部分も多々あったかと思います。私の未熟さ故の至らない点につきましては、どうぞ容赦をお願い致します。

最後になりましたが、本稿が皆様にとって少しでも有意義なものとなりましたことを願うと共に、来る大学入学諸試験において受験生諸君が健闘されることを祈り、結びに返させていただきます。

平成26年12月26日 出納 樂

※【編集者】パピノー教授について調べてみました。AFP=時事通信 2006年5月26日(金)からの転載です

卵がニワトリより先=古くからの論争に決着?—英紙

【ロンドン25日】卵が先かニワトリが先か?古くから議論されているこの問題に決着かー。タイムズなど英国の各紙は一斉に、科学者、哲学者らが卵が先だと結論を出したと報じた。

英ノッティンガム大学のブルックフィールド教授は、この問題を解くカギは、動物の遺伝物質が一生涯変化しない以上、最初にニワトリに進化した鳥は、当初から卵の中でその胚として存在していたに違いないという事実にあると語った。同教授はこのことから、卵の殻の中の生物体は、それがニワトリに変わったときと同じDNAを持っていましたと結論付けた。進化遺伝学が専門の同教授は各紙に対して、「それゆえに、我々が明確にその種の最初の一員だと呼べるのは、この最初の卵だ」と述べている。

ロンドンのキングズ・カレッジの科学哲学のパピノー教授や養鶏業者団体のボーン会長も、この結論を支持している。パピノー教授は、「最初のニワトリは卵から生まれたに相違ない。その卵を産んだのは違った種の鳥かもしれないが、中にニワトリが入っていたのだからニワトリの卵だ。だから、結論としては卵が先ということになる」と論じている。各紙はボーン会長の「論法」は紹介していない。

グローバル同好会の活動

昨年できた「グローバル同好会」(代表:5-4 星野新)の活動が盛んになっています。1月12日には都内で行われた模擬「模擬国連」に参加しました。右の写真は卒業生の渋谷君(東大1年)から英語によるディベートの指導を受けているところです。活動に興味のある諸君は是非星野君を訪ねて下さい。(グローバル教育部の部屋に来てくれても結構です。)会員は、3月実施予定の「地球村プログラム」にも参加します。なお、「地球村プログラム」の参加者はまだ募集しています。プログラムの内容については、グローバル教育部にお尋ねください。



次号では「第3回留学・海外大学進学説明会」の案内を掲載致します。乞うご期待!